

◎小説◎  
**舞麗辞**

◎挿絵◎  
りゅうき夕海

ムチムチボディの  
隣の姉ちゃん  
ダイエツト

が  
始める模様です

立ち読み版



プロローグ 学園アイドルの憂鬱

第一話 姉ちゃん奮闘す！

第二話 運命のミスコン当日！！

第三話 ロデオガールの告白

第四話 姉ちゃん大ピンチ!?

エピローグ 丸く収まりめでたしめでたし……？

## 登場人物紹介

Characters



みずしま あすか

### 水嶋明日香

隣に住む、幼なじみの上級生なお姉さん。今回ダイエットをするにあたり、自分の体型をさんざんディスってきた海斗を道連れにすることに。



しのおかいと

### 篠岡海斗

明日香から言われ放題いじられ放題の少年。

流暢だろうがぎこちなさうが、手を伸ばせば届く距離でTバックのお尻がフリフリと揺れ躍っているという事実には変わりはない。

背後から見れば桃谷間に食い込む紐以外守るものがないそこはもはや裸同然。きめ細やかな純白のもち肌はもちろん、そこにうつすらと生えている透明な産毛までが見て取れて、本当に熟れ頃の白桃のようだ。しかもそれが姉が腰を揺さぶるたびにパチンパチンと打ち合ってプリプリとたわむのだ。

（すごいっ……けど、こんなの見てていいのかな……でも見てろって言ったの、姉ちゃん自身だしっ……!!）

興奮に息を呑む少年は、気づけば呼吸まで乱し始めていた。しかしここで息を荒くしようものなら確実に目の前で踊る敏感な桃肌に感づかれるだろう。少年は努めて呼吸を抑えようと頑張るものの、そうすればそうするほど、酸素不足でますます息苦しくなって呼吸が乱れる——という悪循環に陥ってしまう。

（くっ……苦しい……）

テレビを前にダンスをする明日香と、そのすぐ背後で胡坐をかきつつそれを眺めているだけの海斗。しかし傍から見たら運動している彼女よりそれを見ているだけの自分の方が苦しげ、という世にも不思議な光景に見えたことだろう。

「あっ、なんかコッ掴んだ気がするー！」

そんな酸欠気味の少年のことなど知る由もないダイエット姉は、スポーツが得意なだけ

あつて飲み込みの早さを見せていた。機械的だった腰つきはいつの間にかやら壘惑的な円形を描くようになってきた。流麗なダンスはなかなかサマになっている。

「どうどう？ バッチグーでしょ？」

姉は上半身だけこちらを振り向きつつ、右左右、と素早くヒップを揺すってみせる。

（うわあ……胸っ、ゆさゆさつてっ……けっ、ケツもプリンプリンて揺れてるしっ……!!）

豊か過ぎる胸の谷間はまるでそこにもう一つ尻があるかのようなうだ。たっぷりとした二つの乳球のポリウム感、さながら南風に揺れるヤシの実を思わせた。

腰を揺さぶるたびに互いに打ち合う美尻はしっとり汗に濡れ、綺麗に薄皮を剥いだ白桃のよう。どちらも思わずかぶりつきたくなるほど美味そうだ。

胸や尻だけじゃない。それを支える太腿もまたムチつとした肉付きで、それでいてハリがあつて。まったく、こんな目の毒としか言いようのないものが目の前にあつて手を出さない自分の理性の強さを褒めてやりたいくらいだ。

「つて海斗、アンタなんだつてばそんな苦しそうなよ？」

「いつ、いや別になんでもないつて……ほら、よそ見してる間に終わっちゃったぞ？」

海斗が悶々としているうちにベリーダンスの項は終わったようで、トップメニューに戻っている。

「あらホントだ。ん……でもまあ今日はこのくらいにしとこーかな？ あんま飛ばしすぎ

ると後が続かないしー」

明日香はリモコンを手にもってDVDを停止、そのままフローリングの上に腰掛ける。

「飛ばさなくたって続かないじゃ……いててっ!!」

勃起がバレずに済んだ手前ついつい軽口を叩いた海斗だったが、すかさず姉に頭を叩かれた。

「ほんととアンタって減らず口よねー。投資した以上元は取るわよ」

言いながら姉は持参したボディタオルで身体に纏わりついた汗を拭くと、先ほど脱ぎ捨てた制服を手早く着直す。

どうせすぐ隣に帰るだけのくせに髪の毛の乱れをしつかりと整え、リボンの結び目がピシッとキマったのをハンディミラーで入念にチェックして。

「と、言うわけで。明日も来るからよろしくねント」

桜学園のアイドル・水嶋明日香センパイに変身してから、姉はウインク一つ残して玄関を出ていった。

「帰った、か……」

リビングに独り残された海斗。室内にはまだ姉の甘い残り香が充満しており、一呼吸のたび股間が痛いくらい疼いた。

とりあえずこの昂りを処理しなくては——姉の再襲を懸念した少年は念のため玄関のドアにチェーンをかけてから、足早に自室へと引き上げた。

目の前でケツが踊ってる。

※

……いや、無論尻だけが踊っているなんて怪奇現象はあり得ないので踊っているのは明日香なのだが。しかし海斗の視界には彼女のＴバック尻しか見えていなかった。

大方の予想を裏切って、姉はサボることなく二日目のダンスダイエットに突入、当然海斗も強制的に付き合わされたのだが——次のチャプターのクレゲエダンスでヒップアップとやらは、四つん這いで空腰を使うという十八禁レベルの内容であった。

おかげで彼女のすぐ後ろに座らされた海斗にしてみればまさに「ケツだけ星人襲来」といった趣だ。こちらにぐいっと尻を突き出し、のの字を描くようにグイングインと腰をグラインドさせる明日香に少年はもう何度となく生唾を吞まされっぱなしだった。

（ケツ、汗でテカってるし……つか汗に濡れた女の身体って、マジでエロすぎ……!!）汗ばんでじつとりと濡れた柔肌は、まるで全身が粘膜にでもなったかのようにぬらついていた。ただでさえ健康的な彼女の身体は扇情的と言う言葉を通り越しもはや性的としか言いようがない。姉が汗ばむに従って汗の匂いも立ち込めてきて海斗はいよいよ興奮しきり、自然と荒くなる鼻息を気取られないよう必死に呼吸を整える。

「んっ……キツイっ……けどこれっ、なら……本当に……痩せちゃう……かもっ!?」ダンスの動きに途切れ途切れの姉の言葉も、時折挟み込まれる熱い吐息がなんとも艶かしい。紅潮した首から上だけ切り取ったら、勘違いしかねない絵面であった。

「なにこれ卑猥っ!! けっ、けどジョギングの時みたいになったらまずいな……」

また勃起して姉に見咎められるのを恐れ、どうにか目の前の巨桃から視線を外すものの、  
「こら海斗。アンタさつきから目逸らしてばかりじゃない?」

目ざとい姉にすぐに気づかれてしまった。明日香はくるとこちらを向き直ると、床に座っている海斗と視線を合わせるように膝を伸ばしたままで身を屈める。形良い姉の顎の下で、凶悪なまでに深い胸の谷間が覗いた。

（おっ、おっぱいっ……近い、近いって……!!）

メレンゲのように真つ白な柔肌は紅潮し、まるでミルクにいちご水を垂らしたみたいな淡い桜色に色づいていた。胸はシャワーでも浴びたみたいに所々に玉の汗を転がし、紐のような水着によって寄せられた胸の谷間ではそうして流れ出た汗が注がれて小さな湖を作っていた。

「そっ、そんなことより姉ちゃん……ダンスの続きはよ?」

姉に興奮の証を気取られまいととつさに両手を脚の間につき、彼女の視界から自らの股間を隠しつつどうにか向こうを向かせようとするものの、

「もちろんやるわよ。けどちょっと疲れてきちゃったな……そうだ海斗、アンタマッサージしてくんない?」

「え……マッサージ? なんて俺がそんなこと……」

「だって疲れたんだもん。ちよつと張り切りすぎちゃって……ね、おねがぁーい♥」



床に体育座りで腰を下ろした明日香は片脚を高く掲げつつそうねだってくる。モデルのようなポーjingで差し出された美脚にドキッとさせられつつも、

「おいおい俺は召使いじゃないぞ……？」

照れ隠しのため相変わらずのワガママに少年は顔をしかめて迷惑そうなポーズを見せる。「いいじゃない、あたしはマッサージされて気持ちいい、アンタは普通に生きてたらこの先一生触る機会なんてない女子のカラダを触れて気持ちいい。まさにWin×Winの関係でしょ？」

「えっ、俺の人生ってそんなにお先真っ暗なの……？」

勝手な未来予想図に異論を挟もうとする海斗にしかし、姉はまるで聞く耳持たずバッグの中をゴソゴソと漁りだした。

やがて明日香が取り出したのは一本のプラスチックビンだ。中身は無色透明。オサレな筆記体で書かれた商品名はよく読めないが、どうやらマッサージに使うオイルの類と思われる。

「さあ少年よ、これを使ってお姉ちゃんの身体を思う存分揉みほぐすが良い！」

まるで勇者に伝説の剣を授ける賢者の如く、姉は大上段からオイルを差し出してきた。

「用意がいいなあ……さては姉ちゃん、最初から俺にマッサージさせる気だったな？」

「ニシシ、バレたか♪」

ごまかし笑いの明日香からやれやれとばかりにボトルを受け取った海斗だが、

（とはいえ、マッサージしたらやっぱ姉ちゃんの身体、いろんなとこ触るんだよな……触っていいんだよ、な……？）

そう実感した瞬間、喉がゴクリ、とひとりでに鳴った。唾を飲み込んでからその音を姉に聞かれなかったかとヒヤヒヤしてしまう。

「なにボサツとしてんのよ」

海斗がドギマギしている間にも、姉は持参のタオルをフローリングに敷きその上にゴロンとうつ伏せになっていた。まったくどこまでも用意がいい。

（うわっ……ケツっ……ぷっ、プリンみたいにプルってるし……!!）

寝転んだ反動で包むもののない姉の桃房はむちつと互いに打ち合い躍っている。先ほどのダンスでも散々見せつけられた姉の肢体だが、これからそれに触れるのだと思うと胸も尻も太腿も、何倍も扇情的に見えた。

……まあさすがに胸や尻は触らせてもらえないだろうが。

（くっ、平常心平常心……）

呪文のようにそう言い聞かせつつ、手にオイルを取る。いつの間にか火照っていた掌にひんやりとした液体の感触が心地よい。

それを適当にまぶすと、海斗はそっと目の前の姉の身体に手を伸ばした。一番障りのなさそうな背中へと降り立ったのだが。

ぬるうつ。

「ひゃっ!？」

触れた瞬間、姉の背中が電気でも走ったみたいにビクンと跳ねた。その過敏な反応に海斗も思わず手を引いてしまう。

「あっ、ごめん……」

（つて、なんで謝ってんだ俺が……？）

理不尽さに歯噛みしつつも、今しがた珍しく姉が見せたか弱い仕草は少年の中に何か悪い感情を呼び起こす。

海斗は、今度はゆっくりと背中に軟着陸して雪色の肌全体にオイルを伸ばしてゆく。ただでさえすべすべとした肌は潤滑油のおかげで摩擦抵抗がなくなり、指先に心地よい温もりだけを伝えてきた。

（わあ……赤ん坊みたいに柔らかくてすべすべしてるな、姉ちゃんの背中……）

オイルが塗り広げられてゆくに従い窓からの日差しに姉の肌がヌラヌラと妖しい輝きを帯びてゆく。

背中をマッサージする程度ではこちらもさして興奮もしないだろうとたかをくくっていた海斗だが、オイルによって生々しさを倍加した明日香の肢体は視覚と触覚の二方向から少年を惑わせた。

うつ伏せというのも大きい。この体勢だと姉の視線を気にしなくて済むため、うなじから背中、たつぷりと肉の詰まった桃尻にムチムチの太腿までを思う存分視姦できる。それ

らはどこもオイルでヌラヌラと妖しくテカりを帯び、見ているとついつい力が入ってしまう。少し力みすぎたか、と思った海斗だが、

「んっ……なかなかいい感じじゃない。そのまま足の方もしつかり揉みほぐしてよね」

ちよつと痛いくらいがちようどいらしい姉は満足げに言いながら、グラビアアイドルがポーズを取るみたいに脚を上げて更なるマッサージを促してくる。

「へーへー……」

言われるまま海斗は膝立ちで移動し今度はふくらはぎを両手で包み込むみたいにして指圧を始める。ハリのある肌と柔らかな脂肪、そこに内包された筋肉の弾力のアンサンブルが生々しい。

（姉ちゃんの脚、もつと筋肉質かと思ったけど……ぷにぷにしてて柔らかいんだな……）

その柔和さに女子の脚を撫でまわしているという事実を強く認識させられて、少年は先ほどのダンスの時みたいに呼吸を乱し始めてしまう。

くるぶしのあたりから徐々に遡上するようにマッサージしてゆく。太腿は更にムッチリと脂が乗っており、触れるたびにぷるんと肉が躍ってその若さをアピールしてくる。しかも太腿の肉を揺るとすぐそばの白桃尻もまたブルッと太腿以上に弾力豊かに躍った。

（うわ、ケツがっ……でもまあ、さすがにここは触っちゃマズイよなあ）

とはいえ太腿だけでも充分役得、と恍惚の表情で姉の柔肌を揉んでいると、

「——ねえ海斗、そのままお尻の方も揉んでくれない？ こないだのジョギングの後から

なんだか少し重たい感じがあるのよね」

前世でよほど善行をしていたのか、明日香の方からまさかの助け舟を出してきた。

(いっ、いいのか触って?)

信じ難い催促に少年は内心歓喜に湧くものの、そんな様子を見せたら彼女の尻に興奮しているのがバレてしまう。

「えっ…しっ、仕方ないなあ」

海斗はあくまでいやいやといった風に、平然を装いつつ明日香の臀部へと手を伸ばす。

(けっ、ケツ…姉ちゃんのケツっ…!!)

しかしその内心は言うまでもなく興奮しきりだ。指が震えるのを必死に堪える。オイルマッサージでなければ滲んだ手汗ですぐに姉に緊張と興奮を見透かされたことだろう。

むにゅううう…指が表面に触れた途端、まるで吸い込まれるみたいに柔肉に掌がめり込んだ。

「うおっ!!」

指が肉に沈んだ瞬間、そのあまりの心地よさに少年は思わず声をあげてしまう。背中とは明らかに異なるプリプリとした肉の感触が指先で弾けた。

「ひゃっやだ、海斗なんか触り方がエッチくない?」

「なっ!! そっ、そんなこと…自分でやらせておいて文句言うなよなっ!!」

明日香の物言いに大いにキョドってしまう海斗だったが、姉に拒絶の色は見取れない。

やはりここは彼女にとつて背中やら脚の延長線上、セーフの認識らしい。

（そつ、そういうことなら……遠慮はいらないよな……ねつ、姉ちゃんがマッサージしろつて言つてきたんだしさつ……!!）

姉の反応に自信を得た少年はそれならば、と五指をカエデの葉のように大きく広げて目の前の桃まんじゅうを鷲掴み。そのままパン生地を捏ねるみたいにグニグニと揉みしだく。むにつ、むんにゆいっ……!!

「ひうんっ……やつ、海斗、アンタ意外と握力あるのね」

小さな声を漏らしつつ意外そうに言いながらも、姉は相変わらず臀部へのマッサージを不快に感じている様子はない。

（見た目以上にムッチムチだな、姉ちゃんのケツっ……弾力で指が押し返されるっ!!）

これまで触れたことのある何にも喻え難い触り心地に魅せられて、少年は夢中になって明日香の美臀を揉み捏ねまくる。両手で片房ずつ鷲掴みにし、掌全体で姉の豊臀を堪能。白玉みたいにぷにぷにと柔らかく弾力豊か。なのに時折筋肉をほぐすようにギュッと力を込めて指を押し込むと、途端にキュンツと身を窄めて硬くなった。

（やつ、役得すぎる……かつ、神よ——!!）

両手でムニムニと姉尻を揉みしだきつつ、僥倖ぎようじつに思わず普段信じてもない神へと感謝の祈りを捧げた刹那、

「あらあら海斗クン、なんだか息が上がつてゐただけだ。もしかしてお姉ちゃんの身



体を触ってるうちにコーフンしてきちゃったのかにゃ？」

そんな彼の内心を見透かすように、姉はまたしても愉快そうにニシシ♪と笑いながらこちらに小悪魔っぽい微笑を投げかけてきた。

「うっ、うるさいなっ……俺の意思はともかく、生物学上メスに触れてるんだからそりゃあちったぁ興奮もするだろ」

「やーっぱり素直でないヤツう！ けど、アンタって何気にマッサージ上手よね」

ご満悦の姉に珍しく褒められてしまった。確かに小さい頃親から「海斗は肩揉みが上手だね」なんて言われた覚えがあるが……正直褒められてもあんまり嬉しくない。

そんな気の持ちようが影響したのか、だんだん指が疲れてきた。既に親指の付け根の筋肉がピクピクと痙攣し始めている。

「なあ……そろそろ終わりにしてもいい？」

疲労に耐えかねた海斗が下手に出つつそう問うものの、

「これから何言ってるの、まだ三十分も経ってないわよ？ 最低一時間は保たないと、立派なマッサージ師にはなれないわよ？」

「いや、ならないし俺……」

などと言ったところで無論聞いてくれる相手ではない。仕方なく海斗は指圧を続ける。

「んーそこそこ！ あーこれすっごいいわー……気持ちいいし、揉んでもらってるうちになんだか身体も細くなりそう」





足元へとひざまずく姉に胸で奉仕されているというシチュエーションだけでも堪らないのに。充血し敏感さを増す亀頭から根元に至るまでギュッと締めつけられてはとても堪え切れない。手でしてもらっていた時の遅漏ぶりが嘘みたいのに、熱い射精の予感がこみ上げる。

「ヤバイ、姉ちゃんっ……も、もう限界……!!」

「んっ、ホントにおっぱいよかったんだ——いいよ、そのまま出しちゃって」

「うっ、うんっ……それじゃ——!!」

ずにつ、ずにつずにつずにつ……!!

姉の許可を受けた少年は自らも腰を振りたて、そのまま一気に上り詰め——。

「あれえ、こんなところで何してるの……?」

——ようとした刹那、突如第三者の声が二人の間に割って入った。

『!?』

二人揃って身を硬くしつつ声の方へと顔を向ければ、いつの間にか入口に女子大生くらの女性が立っている。恐らく今日のミスコンのスタッフなのだろうが——。

(まっ、マズイ……!!)

興奮に沸騰寸前だった頭の中が一気に氷点下にまで凍りつく。だってこんなところ目撃されたらミスコンはもちろん失格、それどころか親やら担任やらを呼び出され下手すりゃ二人仲良く退学ものだ。

「いや、これは……!?!」

必死に弁解の言葉を探すものの、絵に描いたような不純異性交遊シーンを晒してなおうまく言い逃れる天才詐欺師のようなスキルなど海斗は持ち合わせていない。

なんとごまかせばいいのか——焦れば焦るほど頭の中は真っ白になってゆく。それは姉も同様のようで、胸に少年のペニスを挟み込んだまま一時停止ボタンを押されたみたいに微動だにしない。

しかしどうも様子がおかしい。こんな場面を見たにしては、お姉さんはやけに平然としているように見えた。妙な話だ。普通もつと驚くなり騒ぐなりしそのものだが——?

「つていうかキミ、なんで一人で倉庫なんかにいるの? あつ、まさかサボりい?」

頭の上にクエスチョンマークを浮かべる二人に、お姉さんは聞き捨てならない言葉を投げかけてきた。

(え、一人——!?)

その言葉に改めてスタッフ女性との間合いを確認し、海斗はあることに気づく。

彼女と自分の間にはいくつものダンボールがある。そして恐らく自分の股間にかす傳く明日香の姿は、出口に立つ彼女からは死角になっていたのだ。

そしてその口ぶりから察するにどうやら彼女、こちらを自分と同じスタッフやバイトの一人と勘違いしているらしい。

(そつ、そうとわかれば!)

目の前の女子大生をごまかすハードルは、棒高跳びのバーからゲートボールのゴールくらいまでは低くなった。

とはいえ海斗は下半身裸。ズボンを穿く余裕もないし、すぐそばには明日香も潜んでいる。

「いや、ちょっと探し物してて。すつ、すみませんすぐ行きますから！」

少年は必死に愛想笑いを浮かべながら、あることないこと言い募る。

「そっか。今ステージの方ヒト足りないからさ、キミも急いで来てくれると助かるな」

「はっはい、すぐ行きます……」

どうにか乗り切った——背中を向けたスタッフに海斗がホッと安堵のため息を漏らしかけた時。

「ふぁうっ!!」

少年は不意に素っ頓狂な声を漏らした。股間が熱した蜜のように甘く蕩ける刺激に包まれたのだ。

「えっ、どうかした？」

少年のあげた奇声に、せっかく出て行きかけたスタッフが再びこちらを向き直る。

「いや、別になんでも……」

あはははは、と空笑いの海斗だが、その内心はパニックだ。

（なっ……なんぞっ!!）

慌てて目だけで股間を確認してみると、そこではなんと姉がパイズリを再開させていた。「ねっ、姉ちゃっ…なにしてんだよ!!」

驚いた海斗が姉にだけ聞こえるように努めて小声で抗議すると、明日香がこちらを向いた。その顔はいつも自分をからかう時に見せるおなじみのイタズラっぽい微笑だ。

「ほれほれ、我慢しないと。そんなに感じてたらバレちゃうわよ?」

まるでバレたら負け、というゲームであるかのように姉が愉快そうにそう囁いてくる。

「冗談よせよっ…バレて困るのは姉ちゃんだろ!!」

すかさずそう論す海斗だったが、

「だからあたしは海斗に無理やりされてたって言うんだってば♪」

少年のペニスを文字通り胸に抱きつつニシシ♪と笑う姉。

「どうしたの?」

そんな二人のやりとりなど知る由もない女性スタッフは、不思議そうにこちらを見つめてくる。下手すりゃそのまま近づいてきそうな雰囲気だ。

（こっ、ここでバレたら…死ねるっ!!）

「いいいや!? これは…しゃっくり! そう、しゃっくりが出ただけですよ…あはは」  
海斗はなんとかドアのスタッフに気取られまいと口からでまかせとポーカーフエイスで応対する。

「そう、ならいいけど…あ、ちょっとゴメン——もしもしい?」

と、ここでお姉さん、おもむろにポケットからケータイを取り出し話し始めてしまった。  
(おいおい、電話なら向こう行ってすりゃいいじゃん……)

とはいえ面と向かっていられるよりは、こちらに対する注意力も散漫になっているはず。この隙にどうにか姉を――少年は明日香の肩に手を置いて股間から彼女を引き剥がそうとするものの。

「んふううつ!!」

姉はそれを阻止するように、持ち前の爆乳ハリケーンを駆使してこちらの敏感な肉根をむにゅむにゅとこねくり回してきた。

(うわわ：おっぱいふわふわのトロトロっ……こっ、腰が勝手に動きそうっ……!?)

いくら電話中で注意力が低下しているとはいえ、さすがに腰を振ったらバレるに決まっている。快感に震える脚を叱りつけ、ともすれば弛緩しそうになる表情筋を張り詰めさせて。今この場に起きている不純異性交遊が外に漏れるのを阻止せんと決死の戦いを繰り広げる。

「へえ、意外と頑張っちゃうんだ？」

作り笑いでの棒立ちを維持する少年に、足元の姉は面白くなさそうに口元を尖らせる。

「おっ、俺は姉ちゃんと違ってエロくない……からな！」

いっぞやのマッサージの件を蒸し返しそう言ってやる。しかしそれは完全に逆効果で、負けず嫌いの姉に火をつけてしまったようだ。

「ほおお……これでも――そんなこと言えちゃう？」

あゝん……ぱくっ♥

挑むような言葉の直後、海斗の股間が一気に熱気に包まれた。

「つく!!」

少年のポーカーフェイスがにわかに歪む。目下では姉の顔が自分の股間に埋められていた。

（ねっ、姉ちゃんに……ふっ、フェラされてるっ……!!）

信じ難い光景だが、陰茎に纏わりつく熱いぬめりはこれが夢でないことを少年に教える。姉が軽く舌を蠢かせた途端、腰骨を甘い疼きが突き抜けて全身が飴になったように甘く蕩けた。

「うえっ……なによこれ、しょっぱいわね」

そんな文句を垂れながら、しかし姉は海斗の股間から離れようとはしなかった。牛みたいに唾液をダラダラと垂らし、口淫奉仕を続けてくる。唇を窄め水飲み鳥のように首を前後に揺り動かして、明日香は咥えた陰茎を扱きたててゆく。

じゅぶっ、ちゅぶっ、ちゅううっ……ストロークのたび姉の唇とペニスとの間から卑猥な水音が鳴り響いた。

（うああ……姉ちゃんが俺のしゃぶってるっ——!!）

手で胸でと続けざまに奉仕を受けてきたが、粘膜同士の触れ合いということもあつてか口でしてもらうのはそのいずれよりも官能的だった。

生まれて初めて味わう女性の口腔内はとにかく熱く、陰茎を丸呑みされるとまるで全身が柔らかな舌の上で舐め転がされているかのような恍惚が襲い、姉が首を退くと窄めた唇の内側に亀頭の傘が引つかかかって鋭い喜悦が弾け鈴口から先走りが滲む。

舌の感触もまた、表面のザラザラとした刺激と裏側のにゆるにゆるとした感じが交互にやってきて、とても慣れたり気を抜いたりできない。

（うああっ…おっお姉さんっ、早く電話を終わらせて向こうに行ってくれえっ……!!）

このままでは醜態を晒した上にバレるという最悪の未来予想図しか見えてこない——すると海斗の祈りが天に届いたのか、

「うん、それじゃね〜……」

少年が祈りを捧げたほんの数秒後、女性スタッフはようやく電話を切ってくれた。

（よっ、よし…後は「ここは俺に任せて」とかなんとか言っ……）

そんな青写真を描きかけた海斗だったが、

「あのさーキミ、さっきからなあーんか様子が変じゃない？」

言うが早いかお姉さん、出ていくどころかこちらへと近づいてきた。平静を装っていたつもりだが、傍目にはバッチリ不審者オーラ全開だったらしい。

「いやいやいや!! ほっホントなんでもないですってばっ……!!」

などと必死の弁明を繰り返す海斗だが、本当の本当はなんでもなくない。姉は先端を咥え鈴口にチロチロと舌を這わせつつ、同時に竿を胸でむにゅむにゅと揉み捏ねて少年の陥



落を誘っていた。

上半身ではスタッフを欺きつつ、下半身では姉の責めに耐え忍ぶ。しかしそのどちらも既に限界だ。

(こっ、腰っ……腰が勝手に動くっ……!!)

腰など振りたてようものなら、間違いなく彼女は両者を遮るダンボールのこちら側にやってくる。そうしたらすべてが終わりだ。とはいえ海斗はもう限界寸前、喻えるなら表面張力でかろうじて零れずにいるようなものだ。このコップが溢れる前に、どうにか姉のイタズラをやめさせなくては――。

(でっ、でもこんなんされたらあっ……がつ、我慢なんてっ……もおムリだああっ!!)

ついに限界を迎えた少年は胸の内で咆哮し、同時にそれまで必死に抑え込んでいた腰を破城槌の如き力強さで繰り出した。

ズンッ!!

「んぶうつ!!」

姉の喉を一気に奥まで貫いたところでどうにか静止し、浅ましい腰振りは踏みとどまる。

「~~~~~!!」

喉を塞がれた明日香は息苦しげにもがもがと口元を蠢かせ、亀頭の先端にくぐもった悲鳴が振動となって響く。姉は両手をばたつかせているものの、さすがにこちらのペニスに嘔み付いてはこなかった。苦し紛れのイラマチオだったが、これでイタズラされずに済む。

「……その、本当に大丈夫ですから。実はここにゴキブリが逃げ込んだみたいだったんでそれをやつつけようとしてたんです。ほら、万一ステージに出ていったら大ごとになっちゃいますから」

「えっ、ゴキ!? ……そっ、それはわたしじゃ力にならない……」

海斗の言葉にそれまで近づきかけていた女性スタッフはスス……と後ずさり。

「ええ、なんでここは俺に任せて先に」

「うっ、うん……それじゃよろしくね?」

黒い悪魔の影に怯えて、今度こそ女子大生スタッフは足早に倉庫を去っていった。

「行った、か……はああ……」

その姿が完全に消えたのを確認し、少年が肩を落として深い安堵のため息をついていると。

「もがもが!!」

下半身から抗議の呻き声——そういえば姉の喉を塞いだままなのを忘れていた。

「おっと姉ちゃん、悪い悪い……」

慌てて腰を引き彼女の喉からペニスを引き抜くと、塞がれていた気道がゴフツと激しい音をたて、水あめみたいに粘っつい唾液が姉の唇と亀頭との間にだらりと太い糸を引いた。

「げほっ、ごほっ……うええっ……ひっヒドイじゃないの、あわや窒息死よ!」

激しく咳き込みながら怒りの声をあげる明日香だが、

「姉ちゃんだってヒトの息塞いで起こしたりしたじゃん。おあいこだろ?」

少年はいつぞやの顔面騎乗目覚ましの件を持ち出し平然と反論してみせる。

「あつあれ……海斗くん、なんだか目がこわあい☆」

いつもよりトーンの低い声色からこちらの怒気を感じ取った姉がぶりっ子するも、

「姉ちゃん、ヒトで遊ぶのも大概にしるよ? マジでバレたらどうするつもりだったんだ?」

さすがに今回は海斗の怒りも有頂天。冷たい視線で姉を見下ろす。

「あつ、そろそろミスコンの会場に〜」

危機を察した明日香は膝を伸ばして立ち上がったもの、

「待てよ姉ちゃん。昼メシがまだ、だろ?」

少年はそんな姉の肩をガッシリと抑え込んで離さない。彼女の方はもう、タンパク質云々なんてどうでもいいのかもしれないが――。

(つーかここまでされて、射精さないで終われるわけないだろ――!!)

唾液まみれの勃起ペニスはいまだジンジンと狂おしい疼きを孕み続け、陰囊の中では無数の精子が放出の時を待ち侘びてうずうずと睾丸を痺れさせている。

むにいいっ!! 少年は目の前にある爆乳を両手で左右から鷲掴みにすると――。

ずにゅぶうううう―― つつ!!

収まりの効かない剛直を雪色の乳谷間目掛け垂直に、根本まで一思いに突き入れた。

「きゃっ!! なっ、なにすんのよ海斗っ!!」

姉の抗議の声も聞こえないふり。姉への制裁という言い訳を手に入れた少年は、中断のため燻っていた獣欲を燃料にしてエンジンシリンダーのように腰を振るスピードを加速させてゆく。

ずぶっ、ずぶっ、ぬちゅっ、ずぶぶうう——ッッ!!

乳谷間に溜まっていた姉の汗と少年の漏らした先走りとを潤滑油代わりに、ペニスはあるたかも杵が餅をつくみたい乳鞭をぐにゅぐにゅと押し潰し、揉み捏ねる。

(すっすげえ、これっ……姉ちゃんのこと……おっ、犯してるみたいっ……!!)

ビキニ水着に寄せあげられた谷間がもたらす甘美な乳圧と陵辱のような背徳感に、少年は我を忘れてめちやくちやに腰を振りたくる。

「だっ、そんな激しくしたら水着っ汚れちゃっ……んあっ、やだ胸っ、熱ういっ……!!」

コンテスト用の水着を汚されるのを危惧して制止の声をあげる明日香だったが、敏感な胸を犯されてその言葉は切ない喘ぎへと堕ちてゆく。眉を八の字に寄せ、桜色の唇をふるぶると震わせわななかせて。泣き顔にも似た表情で姉は乳辱に耐え忍ぶ。

(うわっ、姉ちゃん……めちやくちや可愛い——!!)

いつもは見せない乙女の顔を覗き見て、少年はにわかに興奮を掻き立てられる。陰囊はキュンツと持ち上がり、精輸管を疼痛が突き抜けた。

ずぶっ、ずぶうっ、ずぶっずぶうっずっずっず——!!



何度も何度も秘裂を舐めあげていると、姉が切なそうな声を漏らしながら尻をもじもとさせ始めた。

（姉ちゃんっ俺の舌で気持ちよくなってくれてるんだ——もつと気持ちよくさせたい!!）  
愛しい相手をもつと悦ばせたくて、海斗は舌先を硬く尖らせ肉穴へと挿し入れる。

ぐぬっ、にゆるうつ……窮屈な膣口へ半分まで捻じ込むと、セックスの予行練習みたいに舌で桃色の洞穴をほじくり返す。硬く尖らせた舌先で奥まで突き入れると、敏感粘膜が舌を抜くようにヒクヒクと蠢き肉奥から熱い蜜を溢れたたせた。

「んひゃあっ♥ すごいつ、こんなああっ……やだっ、腰いつ動いちやううつ……!!」

先ほどまでもじもじさせていた尻がくいつくいつと前後にずり動く。女陰への愛撫に堪らず空腰を使い始めたのだ。

「ホント堪え性がないんだから姉ちゃんは……」

そんなことを言いながらも姉がそこまで感じてくれていることに嬉しくなって、海斗もまた明日香の秘所を舐めあげ、穿り、溢れる汁を吸い続ける。

最初は舌を半分程度で弾き返した膣口も、愛情たっぷりのクンニリングスに柔らかくほぐれて今や少年の舌を根元までずっぷりと飲み込むまでになっていた。

（姉ちゃんの膣内、うねうね動いてるっ……こっ、ここに俺のを挿入れたら——!!）

味蕾で膣壁の淫らかな感触を味わいつつ、はしたなく痙攣するこの姫口がペニスにしゃぶりつく光景を想像して少年は股間を鋼鉄みたいにガチガチにしよう。

「ねっ、姉ちゃん……俺、もう我慢できないよっ……!!」

今や挿入することしか考えられなくなった海斗が荒い息を吐きながら上目遣いで姉に求めると、

「んっ……しっ、仕方ないわねえっ……ほらっ、早く来なさいよっ♥」

口ではどうにか余裕ぶっているものの、海斗のがむしやらかなクンニリングスに昂りきっていたらしい明日香もまたこちらの言葉を待っていたように両手を広げ迎えてくれる。

「——あ、でもちゃんと綺麗にしてからよ？　そこに濡れタオルがあるから」

「うっ、うん……!!」

頷いた少年はもどかしげにビキニパンツを脱ぎ去り、姉の言いつけを守って近くにあった濡れタオルでザーメンまみれの自分の股間を乱暴に拭う。

「ちゃんと綺麗にしたよっ……こっ、これでもう挿入れてっ——いつ、いいんだよねっ!？」

興奮のあまり声が上がらず、たった一言さえマトモに発せない。先端が入り口に触れるとくちゅりと小さな水音と共に熱いぬめりが亀頭をしゃぶり、少年はそれだけであわや暴発してしまいそうになる。異常なまでに昂った少年の剛直は、今や鉄板さえ貫けそうなほど逞しく屹立していた。

「いつ、挿入れるよっ……!!」

ずっ……ずぶっ……まるで肉を搔き分けるように、剛直が膣道を抉って陰裂へと潜り込んでゆく。その逞しさに任せて一気に姉を貫こうと少年は腰を突き出す——。

「ちよつ、やつ、痛いっ!!」

と、ペニスの半分が飲み込まれたあたりで、突然姉が表情を歪め小さく呻いた。

「えっ、あ…ごっ、ごめんっ!!」

驚いて腰を引く。慌てて自らの勃起に視線を落とせばそこはうつすらと桜色の体液に濡れていた。

「!! 姉ちゃん血っ、血が出てるよっ!!」

出血を見た瞬間、少年はすっかりパニックになってしまう。

「心配しなくつても大丈夫っ…初めてだもん、少しくらい出るよ」

錯乱する海斗とは対照的に、明日香は平然とそう答える。さすが毎月見る宿命を負っている女という性ゆえか、出血そのものには耐性があるようだ。

（初めて…やつ、やつば姉ちゃんも初めて、なんだ…）

彼氏もいたことがないから、そうだろうとは思っていたが——明らかな証拠を前に少年の胸は驚きと共に処女を捧げられた喜びで満たされる。

とはいえ出血を前に喜んでばかりもいられない。

「でっ、でも今姉ちゃん痛いって…大丈夫かよっ!!」

「平気よ、ちよつとびっくりしただけ…その、本当に好き同士なら最初っから痛くないのかな、なんて思ってたからさ…」

どうやら本当にそう思っていたらしく、言ったそばから真っ赤になる明日香。



「どうする？ やっぱりやめようか？」

痛いくらいにいきり立つ股間を抱えてはいるが、それでもやはり姉の痛がる様子は見たくない。断腸の思いで海斗がそう促すと、

「だっ、大丈夫よ……辛いでしょ、それ？」

しかし明日香は首を横に振り、少年の股間で屹立する怒張に目をやる。姉の破瓜の証をうっすらと身に纏いながら、それでも海斗のペニスは姉の膣内に入りたがるようにビクビクとひっきりなしにしゃくりあげていた。

「そりゃあ、したい……けど……」

「なら我慢なんかしないでいいわよ。あたしがその、ちゃんとスッキリさせてあげるから……アンタは心配せずにお姉ちゃんで気持ちよくなつてればいいの。ほら、おいで？」

姉は優しい言葉と共に開いた脚をこちらの腰に絡ませると、ぐいっと自分の方へと引き寄せてくる。

「うあっ!!」

じゅぷっ……熱く潤んだ泥濘でいねいに再び切っ先が潜り込み、亀頭を粘膜の蕩けるように甘い感触が包み込む。

「……む、無理すんなよ姉ちゃん!!」

思わず甘い声を漏らしながらも、すぐさま姉の身を案じて少年が声をかけると、

「大丈夫だって言ってる……でしょ？ それよりどう？ お姉ちゃんの中……気持ち、いい

かな？」

明日香はやっぱり少し息苦しげにその表情を歪めながらも懸命に余裕の表情を浮かべて尋ねてくる。

「うっ、うん……姉ちゃんの中、すごく熱くてきつくって。うねうねって動いて……めちやくちや気持ちいい……よっ!!」

少年がありがたのままでの感想を口にする、それまで奥歯を噛み締めるようだった姉の口元がフツと笑顔の形に歪んだ。

「ほんと？ ふふっ、良かった……ほら、腰もつと動かして、いっぱい気持ちよくなっていよいよ？」

「でっ、でも……そんな激しくしたら姉ちゃんが……」

「もう、また遠慮して！ 自分で動かないんだつたら——あたしが海斗のこと、犯しちゃうんだからっ♥」

言うが早いか姉は海斗の身体を抱きしめるやゴロンと横に転がり、少年を組み敷いてしまふ。同時に姉の体重で、ズブリと根元までペニスが膣に飲み込まれた。

「うああ……あっ、熱いっ……つか姉ちゃんの重みですごい奥まで入ってくっ……!!」

たつぷりとした巨桃のもたらす快感に、堪らず少年が我慢していた腰振りを再開させる。「おっ、重みってアンタねえっ……おかげでこんな気持ちいい体験できてるんだからね」

姉も負けじと尻をくんつくんと上下させ竿を抜いてくる。根元まで飲み込まれるたび、

四方からぐにゅぐにゅと柔らかな肉がわつと押し寄せてペニスに纏わり付いてきた。先ほど人力ロデオマシンにされた時とほとんど同じアングルながら、今まさに二人は繋がっていた。

「ねえ海斗お、もっかいチューしよ？」

姉は甘えるように囁きながら上体を曲げるようにして身体を密着させ、再び口づけを求めてくる。その両手は一方で背中を愛撫しつつ、もう一方でまたも胸板をくすぐってきた。「ふうっ、んあっ……姉ちゃ……!!」

柔らかな肉の温もりと甘い体臭に包まれながらの愛撫に堪らず海斗が腰を使う。ずぶつ、ぐちゅつと卑猥な水音をたてながら、少年は愛しい姉の破瓜蕾を貫きほじくり返す。

「んあっ ♥ すごいつ、海斗のが奥まで届いて……るっ ♥」

明日香が鼻にかかったような甘い喘ぎを漏らす。姉のそんな声を聞いたのは初めてのこと、しかし彼女のことだから強がりからくる演技ともわからない。

「もう痛くない？ 本当に無理してない？」

本当は腰を止めてから尋ねたかったが、一度蜜壺の味を知ってしまった牡腰は止まってくれない。浅ましく姉を突き上げながらそれでも姉を心配し尋ねると、

「うん……そのっ、海斗とチューしたら好きが溢れて……痛いなんてとんでっちゃった♥」

実に照れ臭そうに、とはいえ実際照れてしかるべき言葉を紡いだ明日香は、証を立てるように自らむっちりとした巨桃をクンツと上下に揺さぶって少年の分身を扱いてみせる。

「くあっ：姉ちゃんそんなされたら俺っ、もう射精しちゃう：よっ……!!」

自分でする時は立て続けに二度なんてとても無理なのに、輸精管は再びの射精に向けて疼きを孕み、陰囊が溜め込んだザーメンを送り出すべく持ち上がってゆくのを感じた。

「もお、さつき出したばかりのくせにまたなのお？ ……ふふっ、でもいいの？ このまま射精しちゃったらお姉ちゃん——妊娠しちゃうかもよ？」

切羽詰まった少年を前に、姉は紅潮した顔のまま目を細め意地悪くそう囁いてくる。

「えっ：につ、妊娠っ……!!」

その言葉を耳にした瞬間、海斗は後頭部を強く叩かれた思いだ。興奮のあまりすつかり意識の外に置いていたが——セックスする、ということは当然ながら子作りをする、ということだ。今の二人は避妊具もつけていないわけで、このまま射精したら姉が妊娠する可能性は充分すぎるほどある。

「うあっ、ちよっ待つて……!!」

さすがにこの年で姉を身籠らせて責任が取れる自信はない。どうにか腰を引き姉の膈内から抜き取ろうとする海斗だが、その刺激に肉壺がキュンッと収縮すると甘い刺激に飲まれるように反射的に腰を突き込んでしまう。それを二度／三度と繰り返すうちに気づけば少年は膈内射精に向けてせっせと抽送を繰り返していた。

「あんっ、海斗すごっ、い……よおっ……お腹づんづんって響いてっ……くるうっ♥」

子宮を突かれて明日香が甘く乱れる。頭ではいけないとわかっているのに、身体の方は

むしろ姉を孕ませてしまいたい欲望に駆られてより激しく腰を打ちつけてしまうのを止められない。

「うああっ…姉ちゃっ、だっ、腰っ止まらなっ…どっ、どうしよっ…!!」

怒涛のような快感と不安にもみくちゃにされて、混乱しきった少年はもう泣きそうだ。そんな海斗の様子を見て、それまで少年の抜き差しに感じ入って鳴いていた姉が不意にプツと嘔きだした。

「ふふっごめんごめんっ…っ…そんなに心配、しなくったってえっ…あたしっ、今日は大丈夫な日…だからっ!!」

甘い喘ぎに途切れさせながらも、子供をあやすみたいないな口調と共に明日香が頭を撫でてくる。大丈夫な日、という彼女の言葉に少年の頭にも『安全日』という言葉が浮かんだ。

「じっ、じゃあいいのっ…こっ、このまま姉ちゃんの膣内に射精してっ—!!」

問いかける少年はしかし万一断られても腰の暴走を止めることなどできそうにない。

「うんっ、いいんだよ——お姉ちゃんの中、海斗でいっぱいにしてっ、海斗だけのものにしてっ♥」

そんな少年を包み込むように。背中の手を回し、脚を腰へと絡ませて。姉はがっしりと海斗の身体をホールドし受精の態勢を取ってくれる。

「うああ…っ…いっ、イクッ…っ…イクよっ姉ちゃんっ!!」

「ひいっ、んんうっ…きっ、きてっ…お姉ちゃんと一緒に——いこっ!!」

パンパンパンパンパンッ!!

姉に受け入れられた少年は百メートルを全力疾走するみたいにながむしやりに腰を突き上げまくり、そして――。

どびゅくつ!! びゅるつ、びゅくつ、びゅぷううう――つつつ!!

本能の赴くまま、姉の子宮目掛けて陰囊中のザーメンを思いつきりぶちまけた。

「んはぁあつ♥♥ 海斗のっ海斗のあつういつ♥ いった、イクのッ、イクううう

ッ♥♥

騎乗位の姿勢で子宮口を怒涛の白濁に打ち抜かれた明日香もまた、少年の後を追うように絶頂を迎える。極まった膈壁がギュウギュウとペニスを締めつけ、まるで乳搾りのような搾精が射精を終わらせてくれない。おかげでペニスはまるでパッキンの壊れた蛇口のよう、射精の最中にまた絶頂させられているみたいに向に勢いが収まらないのだ。

びゅくつ、びゅるつ、どびゅくつ、びゅるるうう――つつ!!

「ふぁぁ……すごい、よぉおつ……!! 海斗のおちんちんつ……まだびくびくつてえっ……おなかの中、海斗でいっぱいになっちゃう……♥」

「つく……ごっ、ごめんっ……これっ、止まらない……!!」

今までこんなに長い時間射精が止まらなかったことなんて自慰では経験がない。本当に陰囊の中の精子一匹残らず姉の胎内に吐き出してしまいたいそうさ。それでも姉は受精の間じゅう少年の身体に四肢を絡め放そうとはしなかった。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**



竹内けん

Takent Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトに続々配信中!!